

日付:2016年2月21日／聖書:ヨハネによる福音書13:1～17

説教:「上着を脱いで、互いに」

注意深くこの箇所を読むと、愛が繰り返されていると同時に「世」も繰り返し登場していることに気づかされます。世(世界、the world)には、コスモスという語が使用されています。これは「調和に満ちた」「いのちあふれる」その場、という意味の言葉です。イエスが愛されたのは、肩書や地位のある「弟子という役割」ではありません。わたしたちが生きているいのちそのものです。イエスが愛するのは、調和に満ちた、いのちあふれる場にいる信託者です。わたしたちの世、が調和ではなく、優越、いのちではなく殺し合い、脅し合いを繰り返していることを告白せずにはおれません。イエスが信託者たちの足を洗うという行為は、人間が世で生きることとはどういうことなのかを示す行動でした。

「あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ」とイエスは指摘しています。これは社会的に自分よりも地位の高い人に敬意を表して呼ぶ慣例的で、礼儀正しい方法です。信託者たちは、イエスとの間に、社会、「国家」で通用している関係をシフトさせていたということです。「国家の中で生きていこうとしているあなたにとって、わたしが足を洗うということとはどういうことなのか？」と、イエスは問うているのではないのでしょうか。

ペトロが「足だけでなく、手も頭も」(9節)と迫っています。先生、主、とイエスに呼びかけていた弟子と、イエスとの関係は「何のかわりもない」といわれてしまいかねないものでした。これが、支配と、隷属の関係です。力で封じ込まれた人間は、なんとかして安全である、自分は捨てられないという保障を目に見えるかたちで、もっと強く、もっと太く、もっと厚く求めるのです。しかしイエスは「足を洗うことのみが必要とされている」と言いました。これがイエスによってもたらされたシャロームの言葉です。調和といのちに相反する国家では、足は切り捨てても、頭だけを残す脅威があふれています。「足になりたくない」「お前が足になれ」と足を切り離しているのではないのでしょうか。イエスはその足こそが洗われなければならないといい、実際に衣を脇において足を洗います。それは、日曜日の朝、遺体に会うために出かけた女たち、弟子たちが墓の中で見る光景と同じです。支配と隷属の関係を維持しようとする圧倒的な力の中で、イエスは死刑となりました。その衣が脇に置かれている墓の中に、国家のしくみとは完全に異なるコスモスが、訪れています。足を洗うために、イエスはご自身の衣を脇に置かれたということ以上の福音があるのでしょうか。

この聖書の箇所からは「目に見えているのに見ないことにされている場所、あなたの足に、わたしは触れます」というイエスの覚悟と、その方法が示されているとわたしは信じます。(日本バプテスト神学校教務主任 渡邊さゆり)